排除の現象学

岡屋昭雄

はじめに

最近、学校を舞台とする事件が次々に起こっている。いじめによる子どもの自殺、あるいは、福岡県の飯塚の私立高等学校で起こった教師の暴力による女生徒の死亡等々、枚挙に暇がないほどに学校で生起する事件が報告される。にもかかわらず、不思議な現象がある。学校内部からのコメント、解説、提言が全くない、つまり、沈黙の状況である。筆者は、果たして沈黙を守るのみの守勢でいいのであろうか、との危惧の念を抱くのである。なまじ学校の教師が学校内部の実状について意見を吐こうものなら「まるで第三者のような意見がよくもいえるものだな。」と批判にさらされるというのだ。学校の実践現場は、日常的に様々な問題が起こっていてその対応に四苦八苦しているのが現実・現状である。学校が学校でなくなっているといっても何のことだか分からないだろうが、ダブルスクールということばに代表される如く、学校以外に学習する場所があるということであり、それが学習塾であったり、家庭教師であったりするのである。つまり、かつては学ぶ場所は学校のみであった。それが、とりわけ進学競争が熾烈になるにつれて進学塾や学習塾の方が学校より成果を挙げているのは周知の事実である。筆者も小学校の教員をしていたこともあり、しかも大学の附属小学校に勤務したが故にその経過をつぶさに見て来たのである。筆者の管見によれば一九七〇年代頃から塾に行くことの弊害が起こってきたようである。それ以前も一部の子どもは塾や家庭教師について勉強をしていた。だからといって、学校の教育に影響を与えることはなかった。それが、一九七〇年頃からは、塾や家庭教師に前もって学校で教える直前に塾で教えて貰っているものだから、教室の授業で教えるのに苦労していたことを想起する。いい加減に予習として勉強しているが

故に、確かに、他の子どもよりは分かっており、教師の発問に手を上げる機会は多かった。当時は、塾や家庭教師は、学校の教科書を使いつつ、他の子どもより先んじて学習しておく方法がとられていたように思う。したがって、塾や家庭教師について勉強する子どもは、クラスの友達よりも先に勉強していることへの優越感を持っていたように思う。

そのことと並行して家庭においても男女という性役割分担意識が崩壊現象を起こし始め、母親もパートに出て働くという現象が現れ始めた。このことは直接には結びつかないが、家庭教育に問題を感じ始めるようになる。子どもの躾が十分にできていない子ども、朝から欠伸をして生活のリズムの乱れている子ども、落ち着きのない子どもの増加、あるいは、朝食を食べてこない子どもが散見されるようになった。「鍵っ子」ということばも流行するようになった。つまり、紐を付けた鍵を首にぶら下げて登校する子どもが多くなったことも確かである。

ところで、学校が学校たり得なくなっている現実を見るに付けても、毎年のように読売新聞社が東京都の教育研究所の協力を得て学校教育についてのアンケート調査を実施している。それによれば、塾の教師と学校の教師との信頼度についての項目では、塾の教師の方が学校の教師よりも評価を得ている。つまり、分かりよさ、分からない箇所を親切に教えてくれる、あるいは、人間的な魅力も塾の教師にあるというのであるから、学校の教師は完全にお手上げである。その原因を明らかにすることも求められるのである。

したがって、極度に管理化された学校のパラダイムに子ども達が息苦しさを感じていることは明らかである。「らしさ」を失っている社会的状況を見定めつつも、学校が学校としての機能を十二分に発揮できる体制を恢復する状況をどのように作り出すのか、その大きな突破口として排除の問題に焦点を当てながら問題点を明らかにすることを本論文の主要な目的とする。あわせて子どもが子どもらしく生きることを可能とする学校の在り方をも明らかにできればとも思っている。

一　排除の構造とは

先ずもって排除という概念を明らかにしておきたい。我々が通常いうところの「村八分」の状況を思い浮かべることができるであろう。あるいは、「異人排除」の論理を思い浮かべてもいい。赤坂憲雄は、「〈異人〉はかれらを疎外・排除する集団によって、さまざまな邪悪のイメージの具現者とみなされるが、往々にしてみずからもこの邪悪イメージの囚人となって、集団の期待する役割に沿いつつ振るまうようになる。こうして受け容れられた〈異人〉というアイデンティティは、〝自分のなかに住まう他者、すなわち彼に向かって、彼を通して語りかける集団の声〟（ゴッフマン）であり、他者のまなざしなのである。(一)」と述べつつ、排除される人間は、疎外・排除する集団によって、さまざまな邪悪イメージの具現者とみなされるが、往々にして自らもこの邪悪イメージの囚人となって、集団

の期待する役割に沿いつつ振るまうようになる、というのである。つまり、疎外・排除された人間は邪悪イメージの具現者と見なされるのは分かるのであるが、疎外・排除された人間も虐めた人間のご機嫌を伺うような行動をとるようになり、彼らの期待する役割をするようになるというのである。この赤坂のいうような観点で、非行の行動を綿密・詳細に検討を加えると番長に対する丁稚といわれている子どもは卑屈といっていいほどに番長の期待する振る舞いをしていることが分明となる。

一方、いじめについても、被害者がいて加害者がいるとの二相で見るのではなく、その周りに自分では手を出さないが笑って見ている虐める側のサポーターとしての「観衆」、そしてその外側には、無関心な「傍観者」としてのサポーターがいるのである。以上の四相がいじめの場面で見られるというのである。したがって、いじめの場面に遭遇した場合、いじめた子どもが悪いとの単純な判断を下してはならないのであり、どのような過程でこのようなことになったのか、を綿密に調査、検討すべきなのであり、逆にいじめた方にも同情すべきことがあったりするのはままあることである。いつもいつもいじめられていてその子に同情して仕返しに参加していじめをしている場合もある。そのような場合でも、いじめをすることがいけないことは当然であるとしても、その子に同情すべき点は明確にしておくことは重要である。また、ここで大事であり、重要な点は、いじめ、いじめられている周縁に自分では手を出さないけれども笑って見ている子ども、あるいは、自分にはかかわりのないこととして無関心な「傍観者」がいることである。彼らも、教師に連絡したり、大人達に連絡をとろうとしていない。それどころか、実際に事件が明るみに出ても、「自分は何もしていない。だから関係ないだろう。」と逃げてしまうのである。いじめを見過ごし、「いじめを止めようとしなかったから悪い。」という正義感は今の子どもにはないのである。ここの所が以前の子ども達と決定的に違うのである。つまり、一人の子どもを多人数でいじめるのは卑怯である、との正義感や、気の弱そうな子どもからお金をカツアゲ（脅迫してお金を出させるか、あるいは、家からお金を持って来させるようなことを指す。）するのはいけないことだ、という価値判断ができないのである。

また、「先生」とか「学校」とかいうことばがいつの間にかその内実を変化させてしまっているのである。尾崎豊の絶叫する「卒業」の歌詞にもあるように、教師は、悪い大人の手先になって生徒から離れた存在とされているのである。我々が通常見るクラブ活動のような教師と生徒が一体となって泥まみれとなりながらも、食らいついていくイメージの世界とは遠いところにあるのである。だからといって全ての教師が悪いといっているのではないことはいうまでもない。それどころか、子どもの生き方にかかわって真剣・真摯に努力している教師の多いことも分かっている。「ムカツク」とのことばにも代表されるように生徒達は、自分をとりまく状況、つまり環境を否定的に捉えていることである。近代という時代の毒でもある「ＥＧＯ」つまり、自己中心的な行動をとるが故に、他者の立

場を考え、思いを及ぼすことを忘れ、彼らの人間関係も希薄になっており、それも表面的な付き合いに終始しているのが現状である。さらに現代の子どもは精神的にも弱く孤独にも耐えることができないが故にいつも賑やかな場所で騒いでいなければとの軽く、しかも軽薄な生き方をせざるを得ないのである。したがって、高校生の、わけても、女子生徒が一回友達にかける電話の時間が平均五〇分との長い時間をかけていることである。何を喋っているのか、自分でも分からないというのである。ただ電話でつながっているというだけで安心できるというのである。あるいは、ハムバーガーショップに屯しながら、互いに違う食べ物を買い求め、それを互いに交換しつつ、とりとめのない話をしている雰囲気が楽しいのである。友達同士で、一つのスプーンを使いながら一つのカレーライスを食べながらそこに友情を感じるというのである。そのことは大学生でも同様である。男子学生と女子学生が、違う食べ物を注文し、それを互いにつつきあいながら食べるのが楽しいというのである。女子学生がカレーライスを半分食べ、男子学生が女子学生の使ったスプーンを使いながら食べる風景はよく見られるのである。

以上、筆者が拘るのは、今の生徒達が、わけても、深い孤独に呻吟しているという状況を述べたいが故である。

このことについて竹内常一は次のような示唆的な発言をする。

……人間は一般に外的な対象としての他人や集団を内面にとりこみ、それをまた投射していくことによって、他人や集団に関係していく。つまり、人間は、外的な対象関係にもとづきつつも、それとは異なる内的な対象関係を発展させ、それを介して外的な対象とかかわるようになる。

こうした視点から学校適応過剰・学校適応不足の子どもをみてみると、そのレベルや質に相違があるにしても、かれらは総じて親や教師、家庭や学校を支配的な他者として自己のなかにとりこんでいるといっていい。このために、かれらは現実の親子関係、現実の教師との関係がどのようなものになろうと、支配―被支配の他者・自我関係をそのうちにもつようになる。このために、かれらの自我はこの支配的な他者に呑みこまれて、すすんで自己を抑圧し、他者の要請に合わせたニセの社会的自己をつくっていくようになる。[6]

すなわち、学校適応過剰・学校適応不足にかかわらず、かれらは総じて親や教師、家庭や学校を支配的な他者として自己のなかにとりこむようになるというのであり、とりわけ問題となるのは、支配―被支配の他者・自我関係をそのうちにもつようになり、そのために、かれらの自我はこの支配的な他者に呑みこまれ、進んで自己を抑圧し、他者の要請に合わせたニセの社会的自己をつくっていくことであるとするのである。ここに問題点があるのである。つまり、子ども時代からリースマンのいう他人志向の行動をとるようになり、自己が他者からどのように見られているのか、他者の期待に応えるような行動をとるようになるのである。とりわけ、他者の過剰な視線、または過激な視線にさらされ続けているが故に激しい不安と無力感に襲われるのである。前述したように尾崎豊の絶叫する

「卒業」の歌詞にも出てくるように教師は生徒の敵にさえならざるを得ないのである。このような状況になるのも、学校が学力一辺倒の定規で子どもを差別・選別を続ける限り排除の問題は生起し続けることは当然である。つまり、学校が子ども達を学力のくびきで縛り続け、囲い込むかぎり、学校は、低学力の子ども達にとって牢獄に見えるのは当然であり、「居場所がない。」との認識は当然生まれて来るのである。学校が子ども達にとって楽しい場所であるためには、学力一辺倒の現在のパラダイムと訣別しなければならない。そして、誰もが自分のよさを発揮しつつ、互いのよさを認め合えるような発想の転換を図ることである。ミヒャエル・エンデの有名な作品でもある『モモ』（岩波書店　一九七六年九月）に登場する学校は、まさに刑務所のイメージである。学校では「遊戯の授業さ。遊び方をならうんだ。」と、登場人物のフランコが淋しそうにいうのである。遊びは子どもが自由に、しかも創造的に遊ぶが故に楽しいのであり、大人から遊びの方法を学んだからという理由では決して遊ぶようにならない。しかも面白くない。大人にとっては、「将来の役にたつってことになる」のであり、役に立つとの原理であり、経済的、能率的であることが唯一の基準であり、したがって、子どもや老人は、役に立たないので、排除されるのである。女性問題、同和教育しかりである。

ところで、授業という営為は、できる子どもが活躍する場でもある。わけても発言力のある子どもが活躍する場を与えられる。高橋和己流にいえば「強者の論理」によって授業は進められる。「弱者の論理」で授業を進めようとすれば、授業は思うように進まない。したがって、教師が発問し、子どもが答えるという形式が全国どこの学校でも行われている。逆に授業についてこれない子どもや低学力の子どもに焦点を当てて授業を進行しようとすれば、子どもが疑問に思っていることや、分からないことがあれば、分からないから教えて貰いたいといえる学級にしなければならないのである。筆者は、「学級づくり」という営為は、学級内で起きるどのように小さな差別でもそれをなくする豊かな実践をすることになる。そして、学級内に班をつくるというのは、互いに意見を交流しつつ、刺激し合い、友達とかかわり合って、どのような小さなことであっても解決できる力量を育てる学級の最小のまとまり、つまり、班なのである。給食を配る、健康調査、班内に学習で分かっていない子がいたらその解決の方法を教えてあげたり、授業で分からないことが出たら分からないことを友達に聞いたりするような姿勢を育てるのも班を学級内につくることの意味である。

また、学級づくりの中軸に人権意識を醸成するとの目的意識に支えられていなければ、班をつくるということが単なる教師の下請けのような仕事をさせ教師が子どもを管理するための手段になってしまうと考えられるのである。このような班をつくっても子どもは自己に挑みかかって自己確認をしたり、自己実現を図るようなダイナミックな営為とはなり得ない。意欲をもち、自己を見つめながら、自分を真剣に慈しみ、育てることに意味や価値を認めるようになる為には教師は学級の子ども達を組織し、学力や人間形成に積極的に

主体的に立ち向かわせる力量が求められるのである。これを教師の支援活動といっていいであろう。

学級づくりという営為は決して一朝一夕には解決できない課題が多くあることが分かる。学級内で起こる様々な出来事を意味付け・価値づけていく過程で自分達のこととして捉え、学級で差別を許さない鋭い人権意識を培う場であるとの認識である。「一人はみんなのために、みんなは一人のために」とよくいわれるのであるが、そのことが真実の意味で保証されるためには多くの実践への取り組みが考えられ、その実践を省察し、反省し、新たな展望をもった取り組みが求められることになる。吉野源三郎著『君達はどう生きるか』（岩波文庫　一九九五年四月）がこの辺りの事情を明確に描いているので参考となる。

以上のように省察すれば、学級の子どもを自然の儘に任せておけば、集団のなかに排除の論理が働くようになるのは必然であろう。同和教育が差別の事実に学びつつ差別を許さない人間として自立する方向をとると同様に、今、問題となっているいじめや不登校、非行の問題はすぐれて日本的な問題として把握せざるを得ない。というのは、社会的病理として捉えられるからに他ならない。したがって、この日本の社会が排除の構造を持っていることを直視せざるを得ないのである。柳田國男は、その著『毛坊主考』に述べる如く、一年に一回やって来る富山の薬売り、三河漫才、毛坊主等、自分達と一緒の土地に定住する人ではなく、稀にしか来ない人間を異人・余所者として位置づけ、排除の対象とした。折口信夫のいうところの「まれびと」でもある。したがって、その土地に住む人々は乞食のような存在を村内ではなく、村外れの周縁にしか住むことを許さなかった。例えば村はずれの小屋に住んでいたり、村の境にある山の洞穴に住んでいたことを筆者も子ども時代に見た経験がある。山口昌男著『文化と両義性』（岩波書店　一九八五年四月）「排除の原則」の節に排除の生まれる根拠にかかわって次のように述べる。

バーク（ケネス・バークのこと　筆者注）のいうところでは、秩序とはそうしてつくりだされた負の象徴から反比例した距離の測定にある。文化の中の人間は、自らが、そういった負の根源的象徴から隔たっていることを、人に示し、自らも納得するために、身近に負の象徴を背負った人または事物の存在を必要とする。日常生活の中で、比較的歓迎される記号とは、それは、「かたち」のみ意識されるか、または「生きられる」かしている記号であり、こうして「徴づけ」られたものを排除した残りの部分からなっていると言いうる。しかしながら、我々の知覚作用は、世界に対して、「徴なし」の記号からなる秩序で整序しえない部分まで及ぼされる。意識の中の因果関係のバランス・シートには納まりきらない部分を意識下の部分にゆだねる。勿論逆説的にいえば、意識下の部分が人間の集団形成・維持のために必要な部分を「意識」が管掌する記号にゆだねるということにもなるだろう。[ロ]

つまり、排除、あるいは、「犠牲者のでっちあげ」とは、秩序をつくりだすために、身近に負の象徴を背負った人や事物の存在を必要にするのであり、ある意味では、自らの正義を主張するためには、

自分達とは対局にある不正義な者（物）を排除するということが起こるのである。山口昌男が例にあげているキリスト教社会で起こった「魔女がり」でも分明のように秩序を守るためには「犠牲山羊」（スケープゴート）が必要とされたのである。それは現在の企業では、競争主義・効率主義・能率主義を貫徹するためには「窓際族」や「左遷」がどうしても必要になるのであり、働いている者にもし怠けたらあのようになるとの恐怖感・刺激を与える機能がどうしても求められることになる。山口も述べるように、排除される側はトリックスター的な要素を持っていることを強調する。

もともと排除の論理が機能するようになるのは前述したように管理教育、つまり、学力一辺倒の教育実践をする教師が人間としての魅力を失っていることにも原因はあるであろうが、筆者は優れて近代の毒が形を変えて現れたものと把握する。つまり、ＥＧＯ（自我）を強調するあまり、人間のよって立つ基盤が崩れてしまっているように思う。「軽い」ということばは今の人間の生き方そのものであるともいえるであろう。できるだけ他人を批判しない、それは自分も批判されたくない。軽いのりで深刻な話は避けて通るのである。他人から批判されれば、「お節介」と拒否するのである。友達はできるだけ少なく、面白い友だちがいいのである。

次に子ども達の使うことばの世界・宇宙が実に寒々しており、排除のことばが多いことについて論究する。子ども相互の喧嘩は昔もあった。虐めの問題についてもよくいわれることであるが、昔も今も変わらないということがよくいわれる。どのような状況でそのようにいえるのかが明確にされていない。「村八分」のような状況であるならば、昔からある。筆者なども子ども時代は腕白であり、よく喧嘩をしたものである。周りをとり囲んでいる状況は昔も今も変わらない。にもかかわらず、卑怯な方法では喧嘩はできなかった。ナイフのようなものを持つとか、石を持つとか、自転車のチェーンを持つとかすることは許されなかった。さらには、一人の子どもを数人で殴る・虐めるといったようなことはどのようなことがあっても絶対に許されなかった。それが現在では、喧嘩をしている者を取り巻く二重の相があり、虐める側のサポーターとその外側にいる無関心な傍観者である。どのような卑怯な方法をとろうとも批判しないのである。それは授業をしている時、いくら周りがお喋りをしていても、注意ができないというのである。「勉強の邪魔になるからお喋りをやめて下さい。」とか「先生の声が聞こえないので黙って下さい。」といえないのである。そのようなことをいえば「シカト」されるというのである。「おまえ先公のスパイか。」とか「いい格好して先生に護摩をすりよるんか。」あるいは、「お前は変に先生のご機嫌をとりよるんか。」といわれるというのである。したがって、「先生」ということばの内実が以前と変わってしまっているというのである。

ところで、排除することばが異状に多いということの問題を明らかにする。無視やシカト・物を隠す・汚す・いやみな陰口・仲間外れにする等の虐めは、その行為者が特定できないことである。いじめにあった子どもが、予断や偏見でいじめをしている子どもを特定

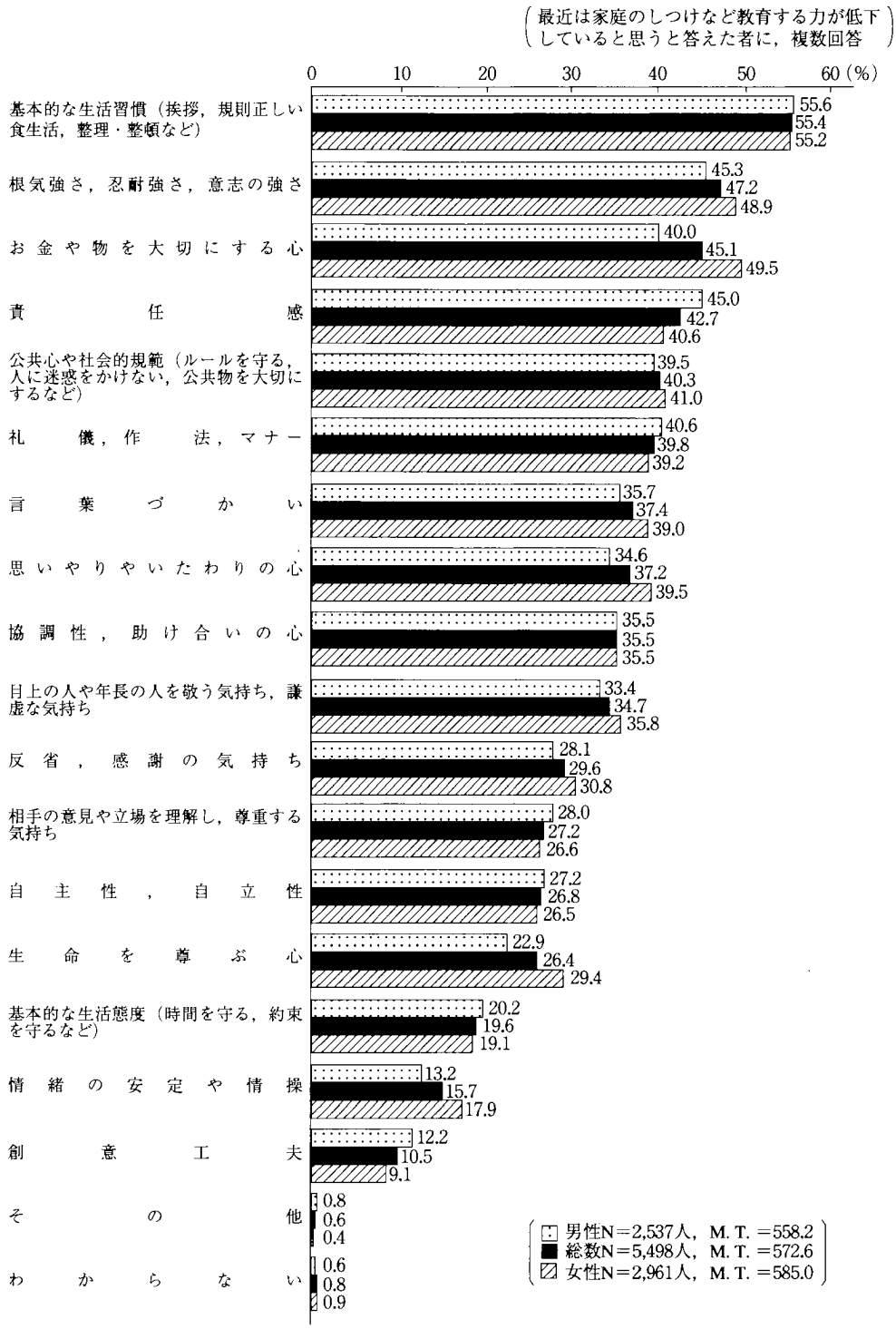
しても明確な証拠を出さない限り、逆に「私を犯人や悪者にしようとしているのか。人権無視じゃあないのか」とか「私の人権を無視しようとするのか。」と食ってかかられるのである。よく子どもの世界で使われているゴミ・バイキン・シラミ・ブス・バイドク・コジキ・人間の屑・疫病神……等のことば。いじめっ子がいじめている子に吐くことばは汚い物・不潔な物・臭い物との内実を持っているのであるが、必ずしもそれとは関係ないのである。多くの標的とされる子どもは、ごく普通の清潔さを保っているのである。いじめっ子が使うことばであるところのバイキン・ブス・ゴミ等のことばは、侮蔑語であって、シニファン、シニフェ――つまり、意味スルモノと意味サレルモノが対応してはいないのである。排除するという現実があってそれを漠然と根拠づける呪文のように「汚い」「臭い」の排除することばが発せられると捉えられるのである。「汚い」「バイキン」とのことばが発せられることによってそのことばはリアリティーを獲得するのである。かつて東京の中学校で葬式ごっこの色紙に先生も名を連ねていたという。それは「シネ」との同義語である葬式遊びに信頼している先生までが、書き連ねていたことに自殺した子どもはショックを受けたことは当然である。奇妙なことに「シネ」「バイキン」といわれた子どもの心に突き刺さった傷を癒す子どもが少ないことにも問題を感じざるを得ないのである。このような排除することばが多くなっている背景を考察しなければならない。よくいじめの構造として「シカト」から「バイキン」それから「……遊び」という経路を辿るといわれている。竹内常一は、昭和六十年（一九八五）九月七日に行われた公開シンポジウム「〈いじめっ子・いじめられっ子〉――〝いじめ〟の構造と指導――」の討論と纏めにおいて次のような重要な指摘をする。「（1）いじめがなぜ迫害に、いじめの構造がなぜ迫害の構造に転化するのか、（2）いじめと友情とはどういう関係にあるのか、（3）子どもの友人関係を育てるとはそもそもどういうことなのかを今後検討していく必要がある。」[四]と、総括的に纏めるのであるが、わけても（1）で触れているいじめの構造がなぜ迫害の構造になるのか、がすぐれて今日的な問題なのである。また、藤田昌士は、現在のいじめの特徴について以下の四項目を挙げ、説明を加える。

いじめの特殊現代的な側面というときにまず問われるのはいじめの現代的特徴である。現代のいじめについては、第一に、陰湿かつ残忍な性格を強めつつあることが指摘されている。第二には、一過性のものではなく、長期化しつつあることが指摘されている。第三には、小学校のみならず、中・高校生にもわたって高年齢化しつつあることが指摘されている。第四には、周囲の子どもが同調し、あるいは傍観することによって教師、一般に大人にとって見えにくくなっていることが指摘されている。[五]

つまり、現代のいじめの特徴は、陰湿かつ残忍であり、長期化しており、低年齢化してきており、いじめを見えにくくしているというのである。

確かに、いじめを発見したつもりで教師が問いただしても、生徒の方は、「それは遊びです。」とか「これはゲームをしているので

図２　家庭の教育力が低下していると思う点



平成５年５月調査「青少年と家庭に関する世論調査」（内閣総理大臣官房広報室）による

す。」と答えるのが通常である。そこで教師が、いじめられていると思われる生徒に聞いても「これは遊びです。」と答えるので、つい見のがしてしまう場合が多いのである。例えば、「空手遊びをしているのです。」のような解答が多かったことも筆者の記憶にはある。

もとより、現在の子どものおかれている状況は大人と同様に厳しいものがある。つまり、人間の生活の根本にある価値観が崩壊ないし、多様化していることである。平成五年五月五日に行われた総理府・内閣総理大臣官房広報室の青少年と家庭に関する世論調査によれば、家庭の教育力は低下しているか、の問いに対してそう思うと回答した人は昭和六三年七月調査では63.3%であったのに対して今回は、75.0%に増加している。つまり、家庭の教育力は低下していると捉えている人が四分の三いることを証明する。この家庭の教育力の低下の原因の究明が求められるところである。このアンケート調査に協力してくれた人の反応によれば、「基本的な生活習慣（挨拶、規則正しい食生活、整理・整頓など）」を挙げた者の割合が55.4%と最も高く、以下「根気強さ、忍耐強さ、意志の強さ」(47.2%)、「お金や物を大切にする心」(45.1%)、「責任感」(42.7%)、「公共心や社会的規範（ルールを守る、人に迷惑をかけない、公共物を大切にするなど）」(40.3%)「礼儀、作法、マナー」(39.8%)、「言葉遣い」(37.4%)、「思いやりやいたわりの心」(37.2%)、「協調性、助け合いの心」(35.5%) 等の順となっている、といわれる。複数回答については図を参照して貰いたい。

以上のように家庭の教育力の低下という現象は子どもの教育のみならず、排除の問題に大きな問題をはらんでいることに着目しなければならない。

二　排除の現象学の具体的な相

筆者は、学力一辺倒の学校教育、つまり能力主義と管理主義が続く限り排除の論理は子どもの世界を席巻すると捉える立場である。したがって、芹沢俊介の述べるような次のような方法の有効性が問われなければならないのである。

「いじめ」をなくすにはだから二つの方法があることが分かる。第一は「暴力はいけません」という単純な暴力否定の方法。これが必然的に監視と管理を強め、体罰という別の暴力と「いじめ」の潜在化という一層始末の悪い自体を招いているのは、ご承知のとおりである。第二は、子どもたちの身体に蓄積した過剰なもの＝イノセンスを力でもって抑圧するのではなく、不可避のものと肯定し、新しい発露の道を子どもたちと一緒に探すという方法である。これが徹底して行われうるためには、イノセンスの過剰な蓄積がどのような理由で、どのようなプロセスを経て、どのような形で生じているのかということの分析・解明が必要である。[六]

つまり、ここで芹沢が述べることは、竹内が前掲のシンポジウムで纏める「規範の相対化」と同質であり、そのことは芹沢のいうイノセンスの過剰な蓄積がどのような理由で、どのようなプロセスを経

て、どのような形で生じているのかということの分析・解明が必要であることの裏表の関係にあるものであることは首肯できるであろう。芹沢の述べる第一の方法は、現在、大部分の学校の生徒指導がとっている方法であり、その結果、管理と監視を強めるようになったのは周知の事実である。第二の方法は、時間と暇がかかることを視座に据えなければならないのであり、その行動の背後にあるものを明確に捉え分析・解明する必要があるのである。芹沢も次のような子どもの実態を紹介する。

「収容少年には一般的にいって、無気力で、主体性がなく、依存的な、受け身の態度が顕著で、他者志向的な傾向がある。他との強調性がなく、自己本位な考え方を持ち、自己主張は強いが、思考力はきわめて弱く、判断の安易さと自己洞察力の不足が目立つ。また快楽追求的で、過剰なまでに権利主張するが、規範意識や道徳的感情が著しく欠落しており、社会的連帯感と人間的共感性が希薄である。職業感は未熟であり、勤労を軽視するとともに、勤労意欲にも乏しい。」

これは、一九七〇年（昭和四十五年）の全国少年院長等会同で論議された「近時の収容少年の実態」を平尾靖が要約したものだという。（井上公大「非行研究ノート」『少年補導』一九七四・九）なぜ、こうなるかは明らかだ。少年たちが現在を退屈だと感じまたは退屈の予感で将来を眺めるからである。[七]

つまり、平尾靖の指摘は単に収容少年の問題ではなくなって、現代の若者に当てはまると捉えることが可能である。したがって、上掲の収容少年の性格を今の子どもの抱えている問題として捉え直し、正確に分析しつつもその性格を変えていく努力を家庭と学校、あるいは教育機関が手を携えて真実の意味での青少年育成の実を挙げなければならないことはいうまでもないことである。昨年の十一月に愛知県の中学校二年生の生徒がいじめによって自殺をするとの痛ましい事件が起こった。こうした事件が再び起こってはならないとの観点から「いじめ対策緊急会議」（主査・坂本昇一／千葉大学名誉教授・聖徳大学教授）が設けられ、七回の会議が開催され、本年三月十三日に報告が取りまとめられて文部省に提出されている。その報告は、文部省教育助成局地方課から発行されている雑誌「教育委員会月報」平成七年四月号（NO.539）に「いじめの問題の解決に向けて」との特集を組んでおり、その冒頭に坂本昇一は「いじめの問題の解決に向けて」とのタイトルでいじめの問題の基本的な認識を三項目挙げる。その項目を紹介すれば「その一は、いじめられる子どもの問題はないということである。第二は、いじめとは、対等な関係でなく、自分より弱い立場にある者に対して、肉体的・精神的な苦痛をともなう攻撃を一方的に継続的に行うことである。第三は、いじめの発生の要因・背景は、家庭、学校、社会にあって、それらが間接的誘因や直接的動議に複雑にからみあって起こると考えられ、その具体的内容とのそのからみあいは個々のケースによってそれぞれ異なっているということである。[八]ということである。さらには、学校と家庭と社会との連携を重視せよというのである。にもかかわらず、いじめ問題については学校側はなかなか認めようとは

しないという現実がある。内部で穏便に解決しようとする傾向があり、その意味では、子どもの日常生活の全貌を知ることは望ましいとはいっても、教師の多忙化による子どもとの対話が減少し、最初の方でも述べたように、「先生」という存在それ自体が、尊敬と信頼の象徴たり得なくなっているとこぼす先生が多いこともまた事実である。

坂本は「三　児童生徒自身による解決」として以下のように述べる。

子どもの問題は本来子どもによって解決されるよう指導することが望ましい。

いじめの問題でいえば、被害者、加害者、観衆、そして傍観者の四つのグループ（相）がある。いじめの行為を笑って見ている観衆や自分とはかかわりのないこととしていじめに背を向けている傍観者は、いじめの直接の加害者と同じように責任をとるべきという指導をする必要がある。

そして、全校の児童生徒すべてが、いじめの問題の解決に取りくむように教師が助力する。

全校児童（生徒）会が、いじめの問題の解決に取りくむ。いじめの実態の調査、その解決のための大会、そして、日常活動としてたとえば〝いじめ、いたずら、いやがらせ〟の追放などをキャンペーンに対応する。

学級としては、学級での話し合いで、一人ひとりの児童・生徒が、自分の人間的弱さを直視することを求める。たとえば、「めんどうなことにはかかわりをもたない」とか「自分さえいじめにあわなければ」とか「いじめはおもしろい」など、それらの人間的弱さが自分の中にあるということを深く自覚して、この自覚の上で、いかにして、それを自らの努力で解決していくかの話し合いをする。

このようにして、子どもの問題は、本来子ども自身によって解決することが望ましい。

そのためには、学校生活の多くの部分で、子どもの問題や活動は、子どもたちで自主的に取り組み、展開し、解決していくという筋道がなくてはならない。すなわち、できる限り、学校生活においては、児童・生徒が、自分たちの在り方、行動の仕方などについて、自分で考えて決めて実行するということが奨励されていなければならない。(九)

つまり、児童・生徒自身による解決がいじめ問題の解決の王道であることとを筆者も知悉しているが故にこの方法を推奨したいのである。つまり、息の長い取り組みが求められることは勿論であるが、教師自身の教育内容・方法を含めて反省を強いられることも勿論、いじめや差別を許さない学級・学校の取り組み、実践が求められるのである。つまり、竹内が強調する「規範の相対化」が中心的であり、中軸に存在し、決して今までの学校での管理的な規則で、子どもを縛り付けることではない。どちらかといえば、学校の教師は学校や学級の決まりに子どもを従属させようとする傾向が強い。例えば、ソックスは白地でなければいけないといわれても、色物の方が

安い値段で買えるとか、履き物の靴も白地でなければならない、ということも生徒が納得していなければ子ども自身の規範となることなく、むしろ大人側からの締め付けと感じられることはよくあることである。したがって、生徒と教師が徹底的に討議を深めつつ、双方が納得することが肝要となるのである。自分たちが決めたことに対しては生徒は納得できるのであり、生徒手帳が問題となったのは、教師が生徒の納得もないままに一方的に生徒が守るべき規範として押しつけるが故である。そしてこのことは親と子どもの関係においても同様である。竹内も「支配としての学校をこえて」に生徒を人間的な眼差しで見なければならないとして次のように述べる。

わたしたちは、いま思春期統合のただなかにあって生きくれている子どもたちを前にしている。かれらは、さまざまな行動をつうじて、対人関係の組みかえと自己の解体・きるべきかを問うている。かれらは、いじめ・迫害、不登校、非行、不安定就労、宗教熱、さらには、自殺などをつうじて、親子愛・友情・異性愛とはなにか、学ぶとはなにか、社会的正義とはなにか、働くとはどういうことか、そして、生きること・死ぬこととはどういうことかを問いつつ、まだ見ぬ社会を探しもとめているのである。

その意味では、かれらは行動的・集団的に人生論を展開しながら、内外にはりめぐらされている社会的・イデオロギー的な囲い込みを突き抜けようとしているのである。そして、思春期統合を試みているかれらの交わりと集団のなかに、かれらにとってももっとも必要な教育的空間をつくりだしていくのである。制度としての学校は、かれらにとっては支配の空間であるが、反学校的な地下組織は、かれらの「学校」であるのかもしれない。(十)

すなわち、竹内は、生徒たちは、かれらの前に立ちはだかる一つひとつの出来事の意味・価値を問いかけているというのである。そして様々な行動を通して、対人関係の組み替えと自己の解体・再編を追求しつつ、いかに生きるべきかを問うているというのである。そのためには子どもたちに必要な教育的空間をつくりだして行くべきだというのである。

確かに、教師とても、支配機構としての学校を超えて行くべきだとの課題を身じろぎもしないで悩んでいるのである。つまり、教師自らが変わらなければ子どもの生き方にかかわって思春期統合をまっとうさせることは困難であることを知らなければならないことは当然である。このことは坂本昇一の述べるような「児童生徒自身による解決」であるとの把握が重要である。そのための教師の支援・援助活動が以前にも増して肝要であることを強調しておきたい。

赤坂が「教師には絶対といっていいほど、いじめが見えない。子供たちが見せないからである。教師に見えるようないじめをするほど、今の子供は幼稚な存在ではない。仮に教師に目撃されたとしても、子供たちは言い訳を用意している、「ふざけていたんです」「ほんの冗談です」「プロレスごっこです」と。いじめられている子供もたぶん、いじめの激化を恐れてか、またはそれだけが自分に許された哀しい役割であるという諦めのゆえに、同意することだろう。教師ははぐらかされた思いで首を傾げながら、すごすごと引き下が

らざるをえない。教師に見える場所でいじめがおこなわれているとすれば、それは教師の無力さへの挑発と考えておいたほうがよい。[十]」と述べるように、いじめが見えなくなっている教師の在り方そのものが問題となるのである。ここにも、「教師」あるいは「先生」の内実が変化している証でもある。

おわりに

今回は排除の現象学として主要にはいじめの問題を述べた。いじめは排除の論理が見られるが故に教育界に深刻な問題を投げかけている。戦後五十年の節目にも当たって、教育の負の面でもあり、日本の経済的発展がもたらした当然の負の遺産であるのかも知れないということに帰着する。このことについては別の機会に論究することにしたい。結論的には子どもの生活場面に癒しの場所や安らぎの場所がなくなっていることが指摘されるであろう。わけても家庭の崩壊現象、もっといえば人間関係の希薄さに逢着するのである。戦後五十年の一つの負の遺産であることだけは確かである。

注

(一)　赤坂憲雄『異人論序説』（砂子屋書店　一九八七年二月）二七八頁。なお次のような指摘も重要である。「社会学的にいえば、〈異人〉の補完項は〈常人〉である。ゴッフマンにならって、ある特定の役割期待から負の方向に逸脱していない者を、〈常人〉とよんでおく。いうまでもないが、〈異人〉と同様、〈常人〉は実態としてではなく、関係として把握されねばならない。〈常人〉の役割と〈異人〉の役割とは、ある社会関係のなかで図／地のように組みあわされ、両者はたがいに相手の部分をなしている。たがいに相手を〈内なる他者〉として内面化している、といってもよい。（中略）／社会がアイデンティティにかんして共有する価値基準は、日常生活のそこかしこで生起する人と人との出会いに、微妙なふかい影を落としている。むしろ出会いの一瞬一瞬に、はじめてこの基準は現実の相をおびつつ人々を規制するようになる。〈常人〉と〈異人〉を分かつ基準はいわば、それぞれの成員によって内面化され分有されている。両者の相互交流は、アイデンティティにかんする基準を表と裏から補完するはたらきをなし、ひとつの統一された全体を構成している、と述べつつ、常人と異人の関係を明確にする。

(二)　竹内常一『子どもの自分くずしと自分つくり』（東京大学出版会　一九八八年五月）「5　自分くずしとしての不登校・非行」一五五～一五六頁。さらには、この節の結論として、前掲のコントロールが崩れると「そうしたかれらの行動は、当然、親や教師、家庭や学校とのトラブルとなっていく。そうしたとき、ある一線をこえていくものがでてくる。それはある子どもの場合は、登校拒否宣言となり、他の子どものばあいツッパリ宣言となる。閉じ込もり、または反抗によって、かれらは、親や教師、家庭や学校ととりむすんできたこれまでの関係をこわしつつ、支配的な他者に呑みこまれてきた学校適応過剰の自分をくずしていくのである。そうすることに激しい罪悪感を感じながらもである。」とあとづけ

るのである。つまり、他者に媚びるような態度や行動をとるのは自己の精神内部に無理が生じることを明らかにしている。ここにも哲学でいうところの「身体論」の問題とかかわってくる。

(三) 山口昌男著『文化と両義性』岩波書店　一九八五年四月）一三六～一三七頁。また、山口は、記号の二重性にも触れ次のように述べる。「一方では、それは、負の項を対極において際立たせ排除しながら、他方では、負の項を通じて、未だ形をとらないが、人間が世界を全体的に捉えるために欠かせない宇宙力ともいうべき部分とのつながりを保たなければならない。この宇宙力とは、時にはエロスといわれ、時にはタナトスともいわれ、更にはまたニルヴァナとも『自然』ともいわれるかもしれない。しかし我々がそれに対して命名できる範囲は常に限られたものでしかない。この『開かれた』状態が閉じられたら、それは、『秩序』そのものを支え絶えず生成させる根源的な諸力の崩壊としてのエントロピーの増大にそのままつながることになる。しかしながら文明が保証する『秩序』とは、そういった諸力からの逃避によって動機づけられてきたこともまた確かなことである。」と述べつつ、秩序は、また排除されたものをも取り込まなければならないとする。それを「宇宙力」として位置づける。つまり、中央が周辺を取り込んで活性化することに似ているともいえるであろう。

(四) 日本教育学会機関誌「教育学研究」第五三巻　第一号　二七頁に書かれたものである。なお次のことばも重要であるので紹介する。「こうした状況を克服していくためには、人間の生命というものは、人類の歴史のなかで、ある役割を持つ存在なのだという感覚を子どものなかに育てること。それによって生命の私物視を批判していくことが必要である。こうした点からいえば、金氏の人権感覚の覚醒という主張には賛成ではあるが、それをこえた問題のとらえ方、宗教的把握をも含めた問題のとらえなおしが必要ではないかとした。」と述べつつ、人間の生命というものはある役割を持つ存在なのだとの感覚を育て、生命の私物視を批判することであるとする。さらには人権意識を超えた問題のとらえ方、宗教的把握をも含めた問題のとらえ直しが必要であるというのは傾聴に値する。

(五) 前掲雑誌　一四頁。そして藤田は、いじめが起こる因由として欲求不満と苛立ちであると捉え、それが人間関係の学習の成立を阻んでいるというのである。そして子どもを抑圧するシスティムとして、能力主義と管理主義であるというのである。そしていじめを克服する道筋として子どもの学校内外の生活における生きがいの創造を挙げる。さらには、規範意識・自己統制力を挙げつつ、次のように述べる。「こうして徐々にではあれ、小学生から中学生、さらには高校生にかけて進行する規範意識をめぐる変化を、仮に「規範の相対化」と名づけよう。その「相対化」傾向は、たとい大人をどんなに驚かせようとも、それ自体は子ども・青年の成長過程におけるいわば心理的必然として正しく理解される必要がある。私たちは、その「相対化」傾向のなかに、青年がおしきせではない自分自身の道徳を模索しつつある過程を見てとる必要がある。」と強調する。最後に藤田は、集団的自治能力を挙げる。にもかかわらず、その内実が示されていないが故に批判のしようがない。「いじめを許さない集団づくり」あるいは、「差別を許さない集団づくり」は今後積極的に取り組む必要があることを指摘しておきたい。

(六)　芹沢俊介著『現代〈子ども〉暴力論』（大和書房　一九九〇年二月）一六頁。前掲の文章の後に「その最大のものは、子どもたちを存在していること自体のレベルにおいて肯定することである。その欲望、その言葉、その能力、その来歴において留保なしに、肯定することである。だが、これは存外、難しい。この難しさに家庭と学校は先ず気付くこと。これが癒しへの第一歩である。」と重要な指摘をする。とかく学校の教師は、よい子、悪い子のように区分したがる傾向がある。筆者なども小学校教師の時代にこのことには苦労した覚えがある。つまり、よい子にも欠点があり、よしんば非行をするような子どもにも評価できる美点があることを肝に銘じなければならない。そのことが、低学力の子どもたちをして、「俺たちの居場所は学校にはない。」という表現になることを忘れてはならない。

(七)　前掲書　一八頁。芹沢の次の指摘は重要であり、この問題は、子どもばかりでなく、大人にも当てはまることである。「加うるに、消費社会において、私たちの欲望はいちはやく資本のシステムによって物の形に変えられてしまう。欲望する以前にすでに、欲望は過剰な物の形で外化され、眼の前にあるのだ。受動性はこうした点からも強められる。だが物がシステムのコントロール下にある以上、欲望も管理されている。このような事態に、子どもたちほど敏感に反応する。もう能動的に行いうることなどどこにもないように思えてくる。倦怠が子どもたちを襲い、その全身を包んでしまう。このようにして、新しい『問題児』たちが出現してくる。」と述べることは今の時代の問題点でもある。大量生産、大量消費のパラダイムから変化を遂げつつあることは当然としても、消費社会にいて、私たちの欲望がいちはやく資本のシステムによって物の形に変えられてしまうという現実を相対化する力量を子どもにつけることは焦眉の急である。

(八)　文部省教育助成局地方課「教育委員会月報」（平成七年四月号（№.53 9））四～五頁。巻頭論文として書かれていることに注目したい。つまり、坂本昇一が提言することが文部省いじめに対する方針として把握できるであろう。

(九)　前掲雑誌　七頁。さらに、坂本は、「教師がいじめについての基本的認識を正しく把握し、それに教師が主体的に取り組むよう構内研修をする。そして、すべての教師が一人の例外もなくそれへの理解をもつのは、各学校のそれぞれのプログラムによる校内研修によるところが大きい。（中略）いじめの問題は、学校のみのものでなく、広く社会、家庭のかかわるものであるから、とくに、保護者に対して、自分の子どもの学校外生活についてよく理解し、管理し、指導することを求める。すなわち、自分の子どもの学校外生活の直接の責任者は保護者であることの理解を求める。」と述べるものの、教師と保護者との連携は思うに任せず、それは地域社会の民政委員や有志指導者といっても理解が得られないのが現状である。わけても学校のリーダーシップが求められているのであるが、学校側はできるだけいじめをいじめとして認めるという雰囲気に乏しいのも実状である。ここにも学校の閉鎖性があることは注目してよいであろう。

(十)　竹内常一著『子どもの自分くずしと自分つくり』（東京大学出版会　一九八八年五月）二〇九～二一〇頁。そして「わたしたちも、かれらとと

もに、その人格の再統合の試みをつうじて、転換期としての現代の課題に開かれた生き方をつくりあげていかなければならない。そうしないかぎり、かれらの苦悩に満ちた思春期統合の試みを真にまっとうさせることもできないだろうし、希望としての教育を発見することもできないだろう。」としてこの書の最後を締めくくっている。

(十) 赤坂憲雄著『排除の現象学』(筑摩書房　一九九一年八月)三四～三五頁。赤坂は「子供たちが、『シカト』とよぶ集団的無視は、眼にみえず、間接的であるために、反撃するいっさいの手段があらかじめ封じられている。その意味では、かんがえられるかぎりで、もっとも残酷な排斥行為であるにちがいない。」と述べていることに問題の深刻さがあると捉えたい。

(おかや　あきお　教育学科)

(一九九五年十月二五日受理)